

# 詩の鑑賞を創作へ生かす単元づくりの試み

— 第5学年「わたしの秋」の実践を通して —

谷 栄 次

## 1 教科書に扱われている詩教材について

平成14年度版の教科書（6社）が扱っている詩を取り出し、低・中・高別に傾向とその特徴について右にまとめてみた。第2学年～6学年までは3～5編の詩を取り上げている。教科書の詩の位置づけは、一単元一教材のものが多く。複数教材のものもあるが、取り上げている詩の関連性は薄い。第1学年では文字の習得と絡めており、詩といってもことば遊び的な短文が多い。夕日がせなかをおしてくる（阪田寛夫）春の歌（草野心平）など決まった学年で扱われるものもあるが、詩の系統性はゆるやかで曖昧なものといえるだろう。

	取り上げてある詩の傾向とその特徴
低学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1学年では、平仮名の習得と絡めて、楽しく音読できるような詩が多い。</li> <li>○挿し絵と合わせて楽しく音読できる。単語の羅列式のものが多く。</li> <li>○動物・生き物・遊びなど身の回りのもの、身近に感じられるものを題材にしたものが多い。題材が季節にあっているものが多い。</li> <li>○具体的なものを対象としている。ストーリー性がある。</li> <li>○リズム感が出るように音の数をそろえている。</li> <li>○単純な文型でできている。</li> <li>○色彩、擬音・擬態語、比喩、体言止め、ダッシュ、リーダー、感嘆符などの技法が使われている。1学年では擬態語が目立つ。</li> <li>○連に分かれ、くりかえしの文型がよく使われている。</li> </ul>
中学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○共感できるような心の動きを示している。</li> <li>○やや抽象的で、想像の世界を楽しめる。</li> <li>○方言が使われているものがある。</li> <li>○見た目の形や短詩など様々な形式のものがあげられている。</li> <li>○擬人法、擬声・擬態語、対比、比喩、くりかえし、倒置法などの技法が使われている。</li> </ul>
高学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○生死、自分、愛、心、未来など主題が抽象的なものが多い。</li> <li>○行数、文字数が多い。難しいことばも多く使われている。</li> <li>○文語が使われている。</li> <li>○俳句と短歌が取り上げられている。</li> <li>○擬人法、擬声・擬態語、対比、比喩、くりかえし、倒置法、体言止めなど様々な技法が使われている。</li> </ul>

6社のうち4社が全学年で詩の創作を位置づけている。創作する上でのポイントとして目のつけ所を設定しているが、系統的になっているとは言い難い側面がある。

これまでの詩の授業を省みたとき、次の2つの課題があげられる。

- 一つ一つの詩を羅列的に扱ってしまい、単元の構成や単元の組織化が十分でない。
- 詩の鑑賞と創作が切り離され、表現方法を学んでも使い生かす筋道が明確でない。

そこで本稿では、これらの課題を克服する一つの試みとして、鑑賞と創作を関連づけた単元づくりの実践について、具体的に考察していくことにする。

## 2 研究仮説の設定と単元構成

### (1) 研究仮説の設定

本単元は、詩のテーマを「秋」とした。それは、児童の生活経験と結びつきやすく、「自分ならではの秋」を表現しやすいからである。また、同じ題材を扱っても多様な見方や感じ方、考え方が生まれやすい。自分も「秋」をテーマに詩を創作するという目的のもと、複数の詩を読む活動を取り入れることによって、学習活動が主体的なものになる。自分たちと同じ題材の詩を鑑賞することで、ものの見方や感じ方、考え方の違いに気づき、詩を読む面白さも味わうこともできるだろう。そこで、研究仮説を次のように設定した。

- 児童の作品と同じ題材の詩を取り上げ、様々な視点やその表現特性について話し合い、鑑賞する場を設定する。そうすれば、児童は、詩を読む楽しさを実感し、自分なりの秋の詩を意欲的に創作することができるだろう。



(2) 第二次の自分たちの詩と比べての鑑賞について

第一次で、児童が集めた秋の詩の中から、児童が創作した詩の題材と重なる6編の詩を選んだ。

詩	作者	鑑賞の中で気づかせたいこと
①もみじのワルツ ②すすき ③秋・秋になると	工藤直子	もみじの葉になりきって表現しているかわいらしい秋の世界に気づく。 連ごとのまとまりを意識し、おおきな空を見つける面白さに気づく。 「ひかり」を比べることで秋のイメージの違いに気づく。
④コオロギ ⑤落葉	まど みちお	コオロギの鳴き声のわく様子からやさしさあふれる秋の世界に気づく。 葉が大地から生まれ、また大地に還るというスケールの大きさに気づく。

第二次の話し合いは、次のような学習の流れで展開した。

<ol style="list-style-type: none"> <li>1 題材を確認する。</li> <li>2 自分たちの詩の代表作品を音読し、感想交流をする。</li> <li>3 めあてを確認する。</li> </ol> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>同じ題材「○○」を扱ったまどさんや工藤さんの詩と読み比べて、いい所を自分のものにしよう</p> </div> <ol style="list-style-type: none"> <li>4 詩を音読（一人読み・黙読）する。</li> <li>5 気づきを書き込む。</li> <li>6 気づきを発表する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・一つの言葉からの気づき、言葉と言葉の関係からの気づき</li> <li>・連どうしの関係、全体からからの気づき</li> <li>・自分たちの詩との比較</li> </ul> <p style="text-align: center;">※教師は話し合いの焦点化を図る働きかけをする。</p> </li> <li>7 詩を音読し、学習をふりかえる。</li> </ol>
---

授業で取り上げた児童の作品「秋」「落葉」とまどみちおの「落葉」

<p>秋</p> <p>まつかかにそまった 森の中 赤黄茶の色 海の上 ひらりひらりと 赤い ちよう ふと上 見ると 赤黄茶のちよう 大群だ そして つもる海の上 ふと横見ると 君がいた にっこり ぼく見て ほほえむ君 きれいだね</p>	<p>落葉</p> <p>あの木の下に 年をとった葉っぱが 落ちてくる 重なり合い おしつぶされ また年をとった葉っぱが のっかってくる いつかまた上に上がったらな</p>
<p>まどみちおの「落葉」</p> <p>人の耳には ただ 「かさつ…」としかひびきませんが その一言を 忘れる落葉はありませ きん色の秋の空から おりてきて いま 地面にとどいた という その一しゅんに 「ただいま…」 なのでしようね それは 長い長い旅のバトンタッチを終えて ようやっと ふるさとの わが家の門に たどりつき ようやっと それだけ言えた そして たぶん それには 大地のお母さんの 「おかえりなさい…」 も重なっているの 「おつかれさま さあ 私の胸でゆっくりお休み…」 という 思いのこもった そのうえ ほんとうは それには 宇宙のお父さんの 「さあ 元気に行っておいで…」 もまた 重なっているの 大地に休むという 明日の生命を 育てるための 「土」への 出発なの 人の耳には ただ 「かさつ…」としかひびきませんが</p>	<p>まどみちおの「落葉」</p> <p>まどみちお</p>

題材「落ち葉」の話し合いで出された児童の気づきの一例を次に示す。

**【児童の作品を読んでの気づき】**

C1 また上に上がれたらなあのところが少しせつない感じがしました。

C2 ぼくも詩の全体からちょっとさみしい詩だと思いました。それは、おしつぶされや年をとった葉っぱというところからです。

**【まどさんの作品を読んでの気づき】**

C3 大地のお母さんは、落ち葉の子どもを見守っていて、宇宙のお父さんはなんか包み込むような役割があるんだと思います。

C4 大地も落ち葉もみんな生きていて命がある。葉っぱが落ちるということは自分の命が終わるとのことだけど、また新しい命が生まれたり育てたりするから、大地は母になっているのだと思います。

C5 宇宙のお父さんは宇宙で、宇宙は地球を作って地球は命を育てているから宇宙も命に関係してくるから宇宙のお父さんとなっていると思います。

C6 わたしは、地球じゃないかと思います。それは、大地が母だからそれよりももっと大きな地球で、そこで全ての命が生まれているからです。

教師 なるほどね。かさつという音から母なる大地，父なる宇宙地球そして命，まどさんってすごい想像力だね。

C7 スケールが大きすぎる

C8 この詩は落ち葉の一生を語ってまた新たな生命を生み出す様子を表しているんだと思います。

C9 ○○君の詩はせつなくてさみしい感じがするけど、まどさんのはスケールが大きい。

**(3) 第三次の詩の創作について**

もう一度、秋の詩を創作するにあたり、第二次で学習した詩を具体例としてあげながら次の3点を考えるように促した。

- 何を題材に扱うか ○詩で表わしたい世界はどういうものか ○使いたいことば
- また、一枚文集には、創作した詩に対する自分の思いも書き加えるようにした。

「わたしの秋」

秋の夕暮れ

秋は早稲でやみきたら  
水はほとほと月の中をおしながらいっしょに走ろうと土声をかける

かわいた道におち葉をころがしながら  
おそくなるよと土声をはける  
家の角を曲がるたむ暗くなる道  
秋は次々と外灯をたけていく  
そして

秋は早稲でかけぬけた

△コメント△  
いっしょに走ろうと土声をかけるのいっしょに走ろうと土声をかける  
ま衣現にしたかった



<p>「秋の夕暮れ」</p> <p>秋は早稲でやみきたら 水はほとほと月の中をおしながらいっしょに走ろうと土声をかける</p> <p>かわいた道におち葉をころがしながら おそくなるよと土声をはける 家の角を曲がるたむ暗くなる道 秋は次々と外灯をたけていく そして</p> <p>秋は早稲でかけぬけた</p>	<p>私とこの詩</p> <p>秋 寒いとかさしいが 秋はあかしてきます 言われるけれど 秋はあかしてきます 本はあかしてきます 秋はあかしてきます ほんわかほんわり 秋はあかしてきます あたたかいんだよ 秋はあかしてきます</p> <p>谷間の 山のおそば すぐそばの 色どりが 包みこんで くれるま</p> <p>道(全連) 茶葉集のこと 秋の夕暮れは 秋の夕暮れは 秋の夕暮れは</p>	<p>秋まよいたおすめの評語</p> <p>おちば 与田準一 おちば、おちば、 キノはば。 やまのこころが ひろつたら おちばのおかねに するかしら。</p> <p>ならのぎ、かしのき、 きのほば。 ちりのこりすが ひろつたら、 でんしゃのき、ぶに するかしら。</p> <p>対句?</p>	<p>「わたしの秋」</p> <p>わたしとあの水</p> <p>そこに見える木を 見るとみどりりと おじいちゃんかき にこりと笑いかけ</p> <p>さわてみるとそうと おぼろげな月を 長い長い年を 一歩一歩命を あたたかい命、うらん おじいちゃんとおばあちゃん うらん、うらん</p> <p>またおいて 私のおおむんにあかして 私のおおむんにあかして 言葉は、</p> <p>ありがたう またまたまよ</p>
---	--	--	--

#### 4 考察

一人ひとりの自分の創作した詩に対する書き込みから第一次と第三次で創作した詩の変容をまとめたものを次に示す。その変容に影響を及ぼしたと思われる詩については、第二次での話し合いの内容から筆者が判断した。(①～⑤は、授業の実際の(2)で示したもの)

児童の変容	影響したと思われる詩				
	①	②	③	④	⑤
<b>【内容—ものの見方、感じ方、考え方—について】</b>					
会話文を入れることでストーリー性をもたせる。	○	—	—	○	—
題材を一つに絞り、主題を命、生死など抽象的なものにしていく。	—	—	—	—	○
春から秋への大きな時間的な流れを取り入れている。	—	—	—	—	—
話者を設定して読み手に呼びかける。	○	—	—	—	—
植物や生き物になりきった表現を取り入れている。	○	—	—	—	○
決まった概念を覆すようなものの見方、とらえ方をしている。	—	—	○	○	—
(例えば 冬の冷たい風 → ほのあたたかい)	—	—	—	—	—
落ち葉から木を見上げる視点を取り入れている。	—	—	—	—	○
目に見えないものを想像の世界で感じるままに表現している。	○	—	○	—	○
人の生き方と植物の生長を対比させてつながりをもたせている。	—	—	—	—	○
<b>【表現技法について】</b>					
連のまとまりを意識して、詩全体の構成を考えようとしている。	—	○	—	—	—
ぴったり合う比喩表現、擬態語を使おうとしている。	—	—	—	○	—
ダッシュを使うことで読み手に想像させる工夫を取り入れている。	—	○	—	—	○
音の数を整えて、リズムのある詩をつくらうとしている。	—	—	—	—	—
しゃれを取り入れ言葉の使い方を楽しもうとしている。	—	—	—	—	—
文字下げの効果を利用している。	—	—	—	○	—
平仮名、片仮名、漢字の語感の違いを意識して使っている。	○	—	—	—	—
題名のつけ方を工夫しようとしている。	—	—	—	○	○

詩を創作するためには、「何を」、「どう見るのか」、「どう書き表すのか」の3点が重要になってくる。特に「どう見るのか」が、詩の主題とつながるものとなるので、最も重要になる。第二次で、優れた作品とふれる機会を設けることによって、ものごとをよく見つめ、その作品のいのち（ものの見方の面白さ、鋭さ、新鮮さといったもの）に深く交わらせることができた。第三次で創作した詩において、題材が絞られ主題が抽象的なものになっている作品が多かったのもその現れだと考えられる。

しかし一方で、概念的で説明的な感じを受ける作品もいくつかあった。ものを見つめる感覚をとぎすますためには、直感力、観察力、想像力が必要となる。これらの力は、本実践だけでつくったものではない。継続して日常の生活の中で、言語感覚を磨く経験を積み重ねることが必要になることを改めて実感させられた。

単元を終えてのふりかえりに、ある児童はこう書いていた。

「まどさんや工藤さんの詩を読んで、学んで、感じて、考えて、成長したところ。  
ひとつのもの・出来事をしっかりと見つめて、ひとつの詩ができること。  
こんな数時間の学習を通して、自分はものを見る目がやさしくなったと思います。  
ひとつの木の実、枝、葉、木の幹……秋の特別なものでなくてもそのようなです。」

#### 【参考文献】

- 1) 江口季好, 「児童教育入門」, 百合出版, 1968
- 2) 大越和孝, 「言葉の力をつける言語単元学習の開拓」, 明治図書, 1999